


沖繩国際大学 2025 年度 FD 支援プログラム成果報告書

下記内容により、FD 支援プログラムの取り組みが完了いたしましたので、「FD 支援プログラム成果報告書」にて、ご報告いたします。

報告者氏名	玻名城政弘  印	所属・職名	学務課・課長
プログラム名称	Tableau を活用した BI ツールの FD・SD 支援への活用可能性の調査		
実施及び成果の要旨	<p>【中退予防と教学マネジメントにおけるデータ活用および自己調整学習導入検討】 近年、客観的データに基づく意思決定（EBPM）による教育改善が求められる中、本学の中退率改善と学生支援の組織化を目指して、先進的な取り組みを行う福岡工業大学（以下、福工大）へのヒアリング調査および本学への導入可能性の検討を行った。以下の 2 点について今後、総合企画室で検討していくことを確認した。</p> <p>1. BI ツール（Tableau）を活用したデータ駆動型学生ケアの可視化と検証 欠席回数、LMS ログ、小テスト結果等のリアルタイム連携による「中退リスクの可視化」について、福工大の事例を調査した。</p> <p>①分析と効果 特定の「センサー科目」における出欠状況などを集計し、職員が抽出したリストを教員と共有する「分散型 IR」の有効性を確認した。</p> <p>②知見 専門部署に頼らず、現場の担当者が自らデータを使いこなす体制が、迅速な介入と教職員間の強い信頼醸成に寄与していることが明らかとなった。</p> <p>2. 自己調整学習理論に基づく初年次教育プログラムの検討 単位修得が不十分な学生を対象とした「自己調整学習オリエンテーション」の教育効果についてヒアリング調査を行った。</p> <p>①実施成果 福工大の実績データに基づき、プログラム出席者の進級率が欠席者を約 20 ポイント上回り（2023 年度実績：出席 64%、欠席 43%）、退学率も極めて低水準（2%）に抑制される有意な差を確認した。</p> <p>②手法の確立 精神論ではなく、目標を「振り返り可能な具体的な行動」に落とし込むワークシート活用や、先輩学生（LA）による支援、心理的安全性を確保する教員の関わりなど、自律的な学習者を育てるための具体的な指導法を確認した。</p> <p>③今後の展望 本調査成果を基に、短期的に「Tableau によるデータ抽出」、中期的に「全学的な自己調整学習プログラム」の導入を目指してはどうか。単なるシステムの整備に留まらず、職員も教学の質に責任を持つマインドセットへと転換を図ることで、本学の教学マネジメントの推進と DX 化に貢献できることがあるのではないかと。</p>		
実施期間	自： 2025 年 4 月 1 日 至： 2026 年 3 月 31 日		

※共同実施者（2 人以上の場合は、別紙添付のこと）

申請者氏名	美里将太  印	所属・職名	総合企画室・係長
-------	--	-------	----------

<p>目的</p>	<p>当初、本調査はFD・SD活動全般におけるデータの可視化と業務効率化を目的としていた。</p> <p>しかし、検討を重ねる中で、本学の重要課題である「中退率の改善」に焦点を絞ることが、今回の調査趣旨である「データ利活用による実効的な教育改善」を体現する最短の道であるとの結論に至った。</p> <p>本学では、総合企画室より毎年各学科へ中退者統計データを送付しているが、現場へのフィードバックが「データの共有」に留まり、具体的な改善策へと繋がりにくい「効果の限定性」が長年の課題となっていた。</p> <p>この背景には、IR担当者が直面する「エビデンスの提示が現場の意思決定や行動変容を促すに至らない、データ利活用の機能不全」という実務上の葛藤や、組織的なボトルネックが存在している。</p> <p>以上の経緯を踏まえ、本調査ではBIツール（Tableau）を、中退リスクを早期に検知・解消するための実効的な処方箋として位置づけた。</p> <p>欠席回数や成績等のリアルタイム連携による「リスクの可視化」を軸に、職員組織が教育の質に貢献する新たな教学マネジメント体制の構築を目指すきっかけとした。これにより、従来の「事後報告」に終始していたデータ活用から、中退を未然に防ぐ「予兆管理」へと質的な転換を図ることを本事業の目的とする。</p>
<p>活動内容</p>	<p>1.調査基盤の構築（4月～8月）</p> <p>本プログラムの遂行にあたり、BIツールおよびデータ利活用に関する専門書籍を整備し、学内データの可視化に向けた事前検討に着手した。</p> <p>これらプロジェクトに特化した調査活動と並行し、通常業務におけるIRの資質向上を目的として「関西学院大学・上智大学共催 IR 合同ワークショップ」や「SPOD フォーラム 2025」に参加した。</p> <p>これらの機会を通じて得られた最新の知見や他大学のネットワークを本プログラムへ反映させることで、本プログラムをより精緻化するための理論的・実践的な裏付けを強化した。</p> <p>2.「大学評価・IR 担当者集会 2025」への参加（9月）</p> <p>2025年9月4日～5日に「大学評価・IR 担当者集会 2025」（大学評価コンソーシアム）に参加。他大学のIR担当者との意見交換や最新事例に触れることで、本学におけるTableau活用の具体的な方向性を探った。</p> <p>3. 中退予防に関する資料収集と福工大へのヒアリング調査の準備・実施（10～1月）</p> <p>これまでの検討の結果、本学の重要課題である「中退率の改善」に焦点を絞ることとした。これに際し、専門知見の深化を目的に中退予防に関するセミナーへの参加や資料収集を行い、福工大へのヒアリング調査を補完・精緻化するための基盤整備を進めた。</p> <p>2026年1月22日に本プロジェクトの核として、先進的な中退予防およびデータ活用を実践する福工大へのヒアリング調査を実施した。同大学の成功事例から、IR専門部署に頼らず現場がデータを駆使する「現場主導の分散型IR」や、職員組織が教育の質に貢献する「教学マネジメント体制」の実態について詳細な知見を得ることができた。</p>
<p>成果・結果・効果</p>	<p>①これまで本学では、中退者の統計を各学科へ送付する運用を行ってきたが、データが「共有」に留まり、具体的な改善アクションへ繋がらない「機能不全」が課題であった。本活動を通じ、IR実務者が抱える「可視化が意思決定に結びつかない」という組織的ボトルネックを再認識するとともに、BIツールを単なる集計道具ではなく、中退リスクを早期に検知し解消するための「実効的な処方箋（ソリューション）」として位置づけるに至った。</p> <p>②福岡工業大学への実地ヒアリング調査を実施したことにより、本学における教学マネジメントの推進に向けた具体的な1つのモデルが明確化になった。</p> <p>特に、専門部署に依存せず現場の教職員が自らデータを活用する「現場主導の分散型IR」の有効性を確認できたことは大きな成果である。</p> <p>さらに、データに基づく「予兆管理」と、学生の自律性を育む「自己調整学習」を組み合わせた同大の成功事例を精査したことで、本学においても職員組織が教育の質の貢献に関与し、中退を未然に防ぐための新たな支援体制の構築を検討していくきっかけを作った。</p> <p>③単なるデータの可視化に留まらず、本学の教職員が「自律的な学習者を育てる」という共通の教育目的を持ち、組織横断的に学生支援にあたるための重要なロードマップとなることが期待される。</p>

今後の展望	<p>2026年度以降は Tableau を活用した「中退予防ダッシュボード」の構築と、特定の学科を対象としたパイロット運用の開始を目指したい。</p> <p>これまでの「事後報告」としての統計資料の送付から脱却し、欠席回数や LMS のログを活用した「予兆管理（プッシュ型支援）」を実質化させていきたい。</p> <p>本プロジェクトを契機として、職員組織が教育の質に貢献する「分散型 IR」のモデルを確立させることができれば、将来的には「自己調整学習」の定着と連動した、本学独自の全学的な教学マネジメント体制へと発展する可能性がある。</p>
-------	---